



## 子どもたちから教えてもらった

### 音楽の学び方

加藤 富美子

#### 子どもたちから教えてもらう

東京学芸大学附属幼稚園長として子どもたちと四年間を一緒に過ごしました。その毎日の中で、音楽の学び方について、本当にたくさんさんのことを子どもたちから教えてもらうことができました。

ここでは、その中から昨年の二〇〇七年度を例に、幼稚園でのさまざまなシーンを思い起こしながら、考えていきたいと思います。

七月のげいじゅつかんホールでのようちえんの五十さいのおたんじょういわいでの、「ようちえんのうた」のすてきなうたごえ、わすれることができます。

そして、「よるまでようちえん」でせんせいたちといっしょにあそんだオペラ「どんぐりと山猫」。みんながげんきいっぱいのどんぐりっこになつてくれて、ほんとうにびっくりしました。あきには、大きいや、とんがったのや、まるいの

やら、いろんなかたちのすてきなどんぐりの絵が  
いっぱい生まれましたね。そして、十二月のこども  
会では、ほしぐみさん、つきぐみさんは、ひとりひ  
とり、みんなちがつた、きらきらかがやいたどんぐ  
りになっていました。(東京学芸大学附属幼稚園小金  
井園舎修了記念文集「つくし」二〇〇八年三月より)

子どもたちが作詞し先生たちが曲をつくって生ま  
れた『ようちえんのうた』。この歌をうたうときの  
とても生き生きとしたうれしそうな子どもたち。そ  
して、絵本『どんぐりと山猫』を基に、読み聞かせやオ  
ペラ遊びや造形活動や体遊びをしながら、一年を通  
して大きく育っていった子どもたちの様子。その姿  
をここから読み取っていただけることと思います。  
これらの表現を生む基礎となった幼稚園の保育計  
画をかいつまんで補足しながら、幼稚園の子どもた  
ちから教えてもらった音楽の学び方の幾つかを、こ

れからまとめたいことにします。

### 生活とつながった音楽環境が 学びの基礎となる

生活とつながげた表現。これは小金井園舎がこた  
わってきたテーマです。アヒル池での生き物たちと  
のかかわりや、一年にわたるお米づくりを通して、  
子どもたちは自然の素晴らしさや厳しさを体験して  
きました。『ようちえんのうた』は、その体験を基  
に、二〇〇六年度の五歳児の子どもたちが作詞した  
ものです。この年の指導講師をお願いした青木久子  
先生(青木幼児教育研究所長)の「生活したこと  
がどのように表現されるかがとても大切」という助  
言がもつ意味を、『ようちえんのうた』を通して深  
く感じ取ることができました。  
そして、この生活の中の思いや願いとつながった  
歌が、幼稚園の日々の暮らしの中でうたい続けられ

ているという環境は、年少組や年中組の子どもも含めて、幼稚園のすべての子どもたちが音楽を学ぶ基礎となっていくます。

始業式で進級したばかりの四歳児の子どもたちが聞かせてくれた元気いっぱい「ようちえんのうた」。この春卒園していった子どもたちががつくって歌い聞かせてくれていた「ようちえんのうた」を、あんなに小さかった幼稚園の末っ子たちがこんな元気に、そしてこんなに気持ちを込めて思い思いの表情で歌っている!! その驚きは大変なものでした。これは、「ようちえんのうた」が幼稚園での子どもたちの暮らしのなかから生まれた歌だったからこそなのでしょう。幼稚園での暮らしをみんなで一緒に紡ぎながら、一人ひとりこの子どもたちが、そのなかで自分の表現を見つけ、それをまた伝え合っていくのです。(東京学芸大学

附属幼稚園小金井園舎「けやき」、二〇〇七年四月より)

### 音楽を体の動きとつなげる

幼稚園の子どもたちは、どんな音楽でも、体全体でそのリズムや音の特徴をつかむことが、とても上手です。それを、体の動きとつなげて表現することができます。

ある日の中央テラス、五歳児の一人の男の子が、トガトンという竹の楽器二本をそれぞれの手に持ち、単純なリズムを叩き続けています。本当に長い時間、そしてこれを毎日毎日、叩き続けているのです。よく見てみると、この子は決して手だけでトガトンを打とうとしているのではなく、ただ体全体を使って、時にはステップも入れてこの二拍子を打ち続けているのです。今までに聴

いたことがある、トガトンのどの演奏よりも、この子が出し続けるトガトンの音はすてぎでした。

この男の子をはじめとし、竹の楽器に関心をもった五歳児の子どもたちは、十二月の「こどもかい」で、『どんぐりと山猫』の伴奏チームを担当し、素朴ながらも芯が通ったリズムで、お話全体を進行させていました。

ここからは、自分のもっている体のリズムを音楽とつなげることで、体のリズムがそのまま音楽の表現につながっていくことの大切さを、子どもたちから教えてもらうことができました。

### 言葉のリズムを

### 音の動き・体の動きとつなげる

子どもたちは、言葉がもっているリズムをとらえ、それを音楽にしてしまうことがとても上手で

す。そのときには、自然と体の動きともつながっていきます。

「どんぐりと山猫」(宮澤賢治作)のどんぐりたちが登場するシーン、「どんぐりどもが、ぎらぎらひかかって、飛び出してわあわあわあわあ言いました」の「わあわあわあわあ」のリズムの面白さを、絵本の読み聞かせでとらえてしまった子どもたち。それに、先生たちが歌うオペラ「どんぐりと山猫」(萩京子作曲)での表現を聴いたことも手伝って、「飛び出して」を聞くか聞かないうちから、「わあわあわあわあ、わあわあわあわあ」と元氣いっばいの声とそれぞれ思い思いの体の動きで表現しながら、部屋いっばいに転がり続け、それを楽しんでいました。

子どもたちは、歌詞の意味をとらえる前に、言葉

の語感にとっても敏感です。言葉の語感、言葉のもつリズムを、そのまま音の動きや体の動きに拡大して表現することができます。

言葉の語感をとらえ、それを音の動き・体の動きの表現として表していくことが、その言葉のもっている意味をより深く表現することにつながる。このことは、歌の学び方としてとても重要なことだと、ここから気づかされました。

### 作品との出会いが 生活と表現をつなげる

昨年はたまたまどんぐりの生り年だったこともあり、遅い秋の園庭には大きいどんぐり、丸いどんぐり、とがったどんぐり……と、「どんぐりと山猫」に登場するどんぐりたちさながらの、さまざまな形・大きさのどんぐりが、毎日毎日、拾い

きれないほど転がっていました。

こどもたちは、「おおきなことだよ、おおきいのが一番えらいんだよ」「そうでないよ、わたしの方が」と、夏に遊んだオペラ「どんぐりと山猫」の表現を思い出して、大騒ぎで歌い動きはじめました。そして、保育室では、画用紙の画面いっぱい、いろんな形、さまざまな色のどんぐりたちが次々と生まれていきました。

それだけでなく、フラフープや飛箱や縄跳び、あるいは阿波踊りや七頭舞など、体の活動や体の表現をする時のイメージづくりに、「まるい」「背が高い」「とんがった」など、どんぐりを形容する表現が繋がっていったのです。

ここからは、絵本『どんぐりと山猫』、オペラ『どんぐりと山猫』という作品との出会いが、どんぐりをめぐり、自然への気づき、表現の高まり、そ



してその両者の強い結びつきを生むことになったことがわかります。

子どもたちは、優れた文学、音楽、演劇などの作品との出会いから、それを活かして生活と表現を強く結びつけていく力をもっている。このことに気づいたこともまた、私にとって大きな学びでした。

### 教えてもらったことを活かすために

幼稚園の子どもたちから教えてもらった、音楽の学び方への気づきのさまざま。これを今後に活かすためにはどうしたらいいでしょうか。

幼稚園の先生たちと一緒に考えていきたいことは次の二点

です。一点目は、ここに気づくことができた子どもたちの音楽の学び方を、保育の計画や教材選び、指導方法に活かしていくためには、どうしたらいいかです。二点目は、子どもたちの保育の見取りの大切さについてです。ここに挙げた例はほんの一例で、毎日の保育の中からは、まだまだ子どもたちから教えてもらうことができる音楽の学び方がたくさんあるはず。

そして私にとってのもう一つの大きな課題は、子どもたちから教えてもらったことを、幼稚園にとどまらず、広く音楽教育に活かしていくことです。なぜならば、これらはすべての人々がすべての音楽を学ぶときの基礎となるものだ、強く思うからです。たくさんの気づきをもろうことができた学大附属幼稚園の子どもたちに心から感謝しながら、今後に向けて歩んでいきたいと思っています。

(東京学芸大学 音楽・演劇講座)